



(昭和12年生)

## 7 回 目 の 年 男

中央区・中央支部 浅野 庄三

7回目の年男である。元気でよくもまあこの年まで来たものである。先の世界大戦はもう遠い歴史上の事になってきて、戦前生まれは少なくなってきた。明治末期生まれの両親は昭和天皇と同じ時代を生きたが、我々は昭和8年生まれの上皇さまと同じ世代である。戦争を体験し敗戦、戦後の混乱期、高度成長期を経て今日の太平を享受している。変動の激しい世を生き抜いてきて、7回目の年男。その時どきの事が思い出される。

国民学校に入学したのは太平洋戦争真ただ中の昭和19(1944)年4月。校庭の隅には日本庭園があり奉安殿と二宮金次郎の像があった。天長節など式典の時は校長と教頭がそれぞれ奉安殿から天皇陛下と皇后陛下の御真影を恭しく掲げ持ち出し講堂正面に掲げた。女教師は袴姿であった。招集令状の来た者は校庭に集められ生徒の前で挨拶し郷軍人の励ましの言葉を受け、日の丸が振られる中を出征して行った。空襲警報や警戒警報のサイレンが鳴る中での勉強であった。疎開してくる児童で教室もいっぱいになった。青空に白い線を引いて飛ぶ飛行機を見ると、あっB29だと言っていた。広島と長崎に新型爆弾が落とされたと言ううわさがあり、20年8月15日終戦であった。丁度夏休みで、感慨はなく、戦争に負けて先生が泣かれたという話程度の記憶しかない。2年生の2学期から軍隊帰りの男の先生が担任になったがよく殴られた。殴られた理由は思い出せない。終戦後の混乱期は食料難、物資不足で運動靴もくじ引きで、ぶかぶかのが当たったこともあった。麦ごはんにはサツマイモの毎日で、雑炊も米粒の少ないお汁であった。皆空きっ腹を抱えていて弁当

を取られたこともあった。お菓子もなく、自転車の荷台に箱を乗せ、チリンチリンと鈴を鳴らして売りに来るアイスクャンディはとてもおいしかったが、たまにしか買って貰えなかった。孤児とか浮浪児といわれる人たちがおり、ラジオからは鐘の鳴る丘の尖がり帽子の赤い屋根や、赤いリンゴに唇よせてとリンゴの歌が流れていた。なんでもこれからは民主主義の時代で最大多数の最大幸福とか言っていた。昭和24年湯川秀樹博士がノーベル賞を受賞して急に明るい希望の持てる時代となってきた。

昭和25年中学生になったが、友達も皆一緒に特に変わったこともなかった。高校生活もあまり印象に残っていない。進学に当たっては、就職難の時代で、コネも無く社交性もない方なので、まじめに働けば食いつぶれが無いという程度で医学部を選んだが、父も後押しをしてくれた。熊本大学医学部に入学したが、解剖、生理、薬理学等基礎部門の教室は熊本城内にあって、大きな木造の兵舎の跡を利用してはいた。寮に入ったが、これも兵舎で、先輩が空いている兵舎に住み着き自然と寮になったと聞いている。給食にはよくクジラが出てきた。今日は肉だと思ったら糸のような筋のある硬いクジラの肉の酢豚もどきであった。

昭和35年、60年安保闘争の時、講義を休み皆でデモに出るのだとクラス委員の呼びかけで参加したが、すぐいやになり途中で抜け出した。酒好きの友人が生ビールを飲んで帰ろうと言うので一杯飲んだ。帰り道顔がポカポカするので、日向を歩いたためと思っていたら、ビールのせいだった。酒の飲めない性質

と分かった。昭和36年池田内閣が所得倍増政策を掲げたが、教科書も表紙を変えただけで一気に値上がりした。当時四大公害病の原点と言われる水俣病が発生し、熊大がその原因はチッソ水俣工場の排水で、有機水銀説を立てた。地方大学でなにができるかと揶揄されたが、内科、病理、生化学教室等大学上げて水俣病に取り組み、医学部長が寮に来て経過を説明されたこともあった。

昭和38年国立相模原病院でインターンをしたが、翌年の東京オリンピックに備えどこも工事だらけで、新宿駅など行く度に出口が変わっていた。昭和39年入局にあたって何科にするか迷った。アルバイトの必要な金の無い者は入ってこなくてもよいという教授もいたが、母校の耳鼻咽喉科に入った。当時教授陣は東大系とか京大系とか系列化されていて、ことに臨床の教授は旧六新八と言われていた国立大でも旧帝大系で占められ、自学出身の教授は限られていた。大病院や地方の公立病院も、それぞれの大学医学部の傘下に入っていてジツツと言われていた。教授は助手講師の任命権はもとより、これらの傘下の病院に医局員を次々派遣しジツツを維持していて、大きな権力を持っていた。新入医局員や入局2、3年の医師にとって教授は近寄りがたい存在で、報告等で教授室へ行くときはまずゴックンと唾のみをしてドアをノックした。開業するにも医師会の規制が強く、郷里など希望の地での開業は困難で、関連病院で長く務めた後その地で開業するしかなかった。

昭和42年インターン廃止運動が起こり、これが全国的な学園紛争へと発展して、ベ平連とか全学共闘会議が活動した。昭和43、4年頃が紛争の一番激しい時代であったろうか。学園紛争の最中の昭和43年4月から助手にしてもらえはらずであったが、国会で法案が通らず、半年延期になった。ノンポリだったが始めて国会を身近なものと感じた。学園紛争

のお陰が毎年のように給料が上がっていった。

学会に関しては昭和40年代初め頃まで製薬会社に協賛を依頼していた。昭和41年秋全国規模の学会で初めて札幌に行った時、旅費宿泊費は製薬会社持ちで、一流ホテルを取ってもらい、食事もサインだけでよく、おいしい蟹やおすしなどを食べた。学会の後は観光が計画されていて層雲峡等に行ったが、これも主催教室の仕事の1つで、医局員が添乗し案内してくれた。学会後の観光は楽しみの1つであった。製薬会社への過度の協賛依頼が新聞社の取り上げる事となり、次第に自粛されるようになってきたようである。

昭和48年頃より医学部の新設ブームが始まり、戦後の米国風の医学教育を受けた昭和31、2年卒頃の教授が多く誕生し、教室の雰囲気も変わってきようである。大学病院で10年余過ごし、赤十字病院の勤務医として6年余、岳父の跡を継承して昭和57年から33年間開業医生活を送った。大学の時は、仲間は多いし勤務も自由が利き楽しかったが、学会発表などの義務があり気が重い、勤務医も業績が上がらぬと予算請求の時など肩身が狭い、医員の少ない耳鼻科では入院患者を診るために休日でも出て行く必要があり、学会出張も留守を頼まなければならない不自由であった。開業は孤独で、教室の先輩後輩も皆競争相手である。

平成4年から12年間鹿児島市医師会の理事を務めたが、医師会病院、検査センターともに順調な時代であった。多くの知己を得ていい経験をした。敗戦から高度成長期の激動の時代を潜り抜け、7回目の年男となり、少し余生を楽しむ心境になってきた。

「若きにもよらず、強気にもよらず、思いがけぬは死期なり、今日までのがれ来にけるはありがたき不思議なり。徒然草第137段」